

(様式4)

令和5年3月10日

富山県教育委員会教育長 殿

学 校 名 富山県立上市高等学校
校長氏名 清 水 卓

2022年度学校総合評価を別紙(様式5)とともに提出します。

2022年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

(1)教科指導

- ①基礎学力の向上と学力把握のため、ベネッセ社の「クラッシー」を導入した。アンケート結果では、勉強が嫌いな生徒が87%を越える中で「クラッシー」の取り組みは楽しいと答えた生徒が49%となり「学び直し」の取り組みに一定の効果が見られた。
- ②授業でタブレットPCなどICT機器を活用する教員が増えている。生徒から「メリハリのある授業でわかりやすい」と答える生徒が増えた。
- ③新教育課程移行に伴い観点別評価が1年生から導入された。昨年度より教務部、各教科で協議を重ねた結果、混乱はなく概ね順調に評価が進んでいる。

(2)生活指導

- ①基本的生活習慣を確立するために生徒と教師との関係づくりに取り組んだ。朝のさわやか運動ではさわやか委員が中心となって生徒主体で取り組んだ。
- ②毎月の生徒指導重点目標を生徒が校内放送で呼びかけ、生徒が具体的な目標を生徒に伝えるよう取り組んだ。
- ③外部講師を招聘し「着こなしセミナー」、「ネットトラブル」、「薬物乱用防止」、「性教育」、「交通安全」など講演会等を開催し、規範意識が高まるよう取り組んだ。

(3)進路支援

- ①上市町と連携し上市高校キャリア教育プログラム「職業を知る会」、「職場見学」、「インターシップ」を全て実施することが出来た。今年も新型コロナの影響でインターシップ期間の短縮になったが、来年度からは受け入れ先と調整し5日間で実施できるようにしたい。
- ②これまでの「進路体験講座」から「進路ガイダンス」に内容を切り替え、全生徒が参加するよう取り組んだ。生徒は個々の希望にあったブースに参加できたことで、社会人になるための基本的な考え方を深く学ぶことが出来た。

(4)特別活動

- ①新型コロナ感染症拡大防止対策をとりながら「体育大会」、「マラソン大会」、「文化活動発表会」を全て実施することが出来た。行事の準備や運営方法など、教員と一緒に思い出しながらの取り組みとなったが、全員が一堂に会する行事は大変熱気あるものとなった。
- ②部活動は活動が制限される中でも、定期的な「部活動アンケート」では、個人目標を達成した生徒が69%と高く、昨年の55%より大幅に向上した。

7 次年度へ向けての課題と方策

(1)学習活動

- ①わかりやすい授業になるよう、互見授業や研修会等を通じてICT機器やデジタル教科書の活用をさらに進めていく。
- ②基礎学力が向上するよう「クラッシー」に継続して取り組む。現在は形態が補習授業となっているが、授業内で導入できるよう実践を重ねていく。

(2)学校生活

- ①規範意識を向上させるために、家庭と連携しながら「家庭内でのルール」作りを進める。
- ②遅刻が多い生徒の根本原因が探れるよう、保護者や生徒が一緒になって考える機会を設け指導に取り組む。

(3)進路支援

- ①上市高校キャリア教育プログラムを継続的に実施してきたことで地域の方に認識してもらえるようになってきた。更に効果があがるよう、保護者も参加できる機会を設定していく。
- ②就職は売り手市場となっているが、それぞれの企業が時代の変化に合わせて求める人物(能力・成績・適性等)を継続的に把握し、データ化することで情報を有効に活用できるよう取り組む。

(4)特別活動

- ①学校行事の主体者は生徒であることを生徒自身が自覚できるように、あらゆる行事で機会をつくり経験が積めるよう指導していく。
- ②これまでの、1年生部活動全員加入制を見直し、精鋭で部活動の活性化を目指し充実度を高めていく。

8 学校アクションプラン

令和4年度 上市高等学校アクションプラン - 1 -		
1 重点項目	教科指導	
2 重点課題	①基礎学力の定着に向けた教科指導の改善 ②新課程導入に合わせた評価と授業改善	
3 現 状	①ー 1 現在の自分の学力を把握していないため、具体的な目標が立てづらい生徒が見られる。 ①ー 2 基礎学力向上の取り組みとして、今年度から1学年全員が火曜7限にタブレットPCを活用した取り組みを始めた。 ①ー 3 教師と生徒双方向の授業展開ができるようICT機器の利用を含めた授業改善を進めている。 ② 各教科で新課程導入の1学年の教科において観点別評価の導入と授業改善を進めている。	
4 達成目標	教育指導の改善を図り、基礎学力の具体的目標を達成させる。	基礎学力不足の生徒の減少が10%以上
	①授業開始後、身につけてほしい基礎学力の内容を明示する。 ②考查前に基礎学力不足の生徒に学び方を教示する。	
5 方 策	①ー 1 各教科で生徒に身につけさせたい基礎学力の内容を明示し、基礎学力が身につけていない生徒に対して、考查前に不足している学習内容と学び方を教示する。 ①ー 2 教育ソフトを利用した学習を行い、基礎学力の定着度を検証する。 ①ー 3 ICT機器の指導法を研究・活用し、「主体的・対話的で深い学び」の要素を盛り込んだ授業を積極的に行う。 ①ー 3 必要に応じて授業に対する生徒アンケートを行い、分析結果を教科指導の改善に役立てる。 ①ー 3 互見授業や校内外の研修に参加し、「わかる授業」を進める。 ②教科担当者の話し合いや校外の研修などを通して、新課程科目の適切な評価の在り方や対応した授業を検討し、実施する。	
6 達 成 度	①ー 1 全教科で基礎学力の内容を示すことはできなかった。 ①ー 2 1学年でベネッセ社の学習アプリ「クラッシー (Classi)」を活用結果、1学年のアンケートによると学習意欲の向上が見られ、一定の効果が認められる。 ①ー 3 学校訪問や通常授業で、タブレットなどICT機器を日常的に活用する教員が多い。 生徒の授業アンケートは教務としてはできなかった。 互見授業を学校訪問時に実施した。ほとんどの教員が他の教員の授業を参観した。 ② 観点別評価が1学年で導入されたが、概ね順調に評価が進んでいる。	
7 具体的な 取組状況	①ー 1 全教科で基礎学力の内容を示すことはできなかった。 ①ー 2 1学年でベネッセ社の学習アプリ「クラッシー (Classi)」を活用して、基礎学力の定着を行っている。1学年のアンケートによると学習意欲の向上が見られ、一定の効果が認められる。 ①ー 3 学校訪問でもICTを活用した授業が複数見られ、通常授業でもタブレットを日常的に活用する教員が多い。 生徒の授業アンケートは教務としてはできなかった。 互見授業は今年度1回の実施であったが、学校訪問時に実施したこともあり、ほとんどの教員が他の教員の授業を参観した。 ② 新課程移行に伴い観点別評価が1学年で導入された。各教科で研究を進めた結果、概ね順調に評価が進んでいる。	
8 評 価	C	
9 学校評議員の意見	①いろいろな取り組みが成果に結びつき学習意欲が高まって行くことを期待している。 ②リスタの取り組みにより「勉強が嫌い」87%が「好き、普通」が75%と答え安心した。 ③勉強は嫌いでも学校が好きということはとても重要で、今後の基礎学力向上に希望がもてる。	
10 次年度 に向けて の課題	①わかる授業のさらなる深化をはかるため、ICTの活用をさらに進める。 ②新課程に対応した「主体的で対話的で深い」授業の実施と評価を進める。	

(評価基準 A : 達成した B : ほぼ達成した C : 現状のまま D : 後退した)

令和4年度 上市高等学校アクションプラン 年度末評価 - 2 -

1 重点項目	生活指導
2 重点課題	①基本的生活習慣の確立 ②学校生活および社会生活への適応 ③携帯電話・スマートフォンについて、正しい使用ができる生徒の育成
3 現 状	①「基本的生活習慣の自己管理」「身だしなみを整える」「公共のマナーを守る」等を指導重点として規律と秩序ある校風作りを進めている。 ②通学駅や玄関前での挨拶や服装指導を行っているが、コミュニケーションをとることが苦手な生徒や制服を着崩している生徒が見られる。 ③携帯・スマートフォンの校内使用違反者数は、年間延べ数でR3年度は235件とR2年度より25%増加している。指導のあり方を確認し、保護者と連携をしながら校内での取り扱いを徹底している。また友人関係のトラブルの原因のほとんどがSNSの利用方法と関連しており、生徒のSNS利用のマナーを向上させることが求められる。ネットパトロールによる指導は、減少しているものの生徒が重大犯罪に巻き込まれないためにも、引き続き指導が必要である。
4 達成目標	①②挨拶・服装・公共マナーについて、生徒の意識 改善を促す指導の充実 ③ 携帯電話の違反(ルール違反・ネットパトロールによる指導)の指導件数の減少 ①②玄関前指導を通年で継続し、挨拶や服装等に係る意識の向上60%以上 ③ 前年比10%の減少(件数)
5 方 策	①②頭髪、服装の計画的な自己管理が出来るように生徒の意識改善を促すために、事前に生徒・保護者へ指導する日を連絡する。また、毎朝、挨拶を交わしながら生徒とのコミュニケーションをとる。さらに、進路指導と絡めて、社会人としての在り方を考えさせ、生徒主体の指導体制を工夫し、生徒の内面的な成長を促す。 ③生徒がいじめ等のトラブルや犯罪に巻き込まれないようにするとともに、学習への悪影響を防ぐため、SNSを利用する際の情報モラルを授業等で考え、生徒・保護者の意識の改善を図る。改善が見られない生徒には、家庭に連絡し、学校の方針を理解してもらい協力を得る。
6 達 成 度	①挨拶については、全職員の協力を得、生徒自ら挨拶ができる雰囲気作りを行い、玄関前、上市駅構内、授業のはじめと終わりに声を出して挨拶をする生徒が確実に増えている。 ②令和4年度の定期頭髪服装指導で再指導を必要とした生徒は、1学期19.8%、2学期118.8%、3学期17.4%で平均19.6%と昨年より2.4%高い状態であった。原因の一つとして、男子の流行の髪型が規定に反していることが考えられる。根気強い継続指導をし、生徒の内面からの成長も促しながら指導したい。同時に生徒と対話を通じて頭髪規定の見直しが必要ならば検討したい。 ③令和4年度3学期1月までの段階で、スマートフォンの使用違反延べ数は261件で、昨年同時期より110%増加した。主な原因として、1年生の増加傾向があり、引き続き全体への指導に加え、学年との協力体制を整え、生徒の実態に応じた個々の指導を行うとともに家庭でのルール作り必要だと考える。
7 具体的な 取組状況	①②毎朝の上市駅や生徒玄関前での挨拶や服装指導の声かけを教員だけでなく、さわやか委員の生徒と一緒にいながら、生徒主体の取り組みや生徒間での意識作りを大切にしている。また、生徒自らが月毎の指導重点目標を設定し、放送で呼びかけながら、生徒が具体的な目標をもって生活できるようにした。 ③着こなしセミナー、ネットトラブル教室、薬物乱用防止教室、性教育、交通安全教室などの外部の専門家の講話を通して規範意識を高めるように指導した。
8 評 価	C
9 学校評議員の意見	スマートフォンの使い方やモラルは言葉で伝えても、生徒が自分事として捉えることは簡単ではない。何か良いアイデアがあればいいと思う。
10 次年度 に向けて の課題	①服装違反、スマートフォンの使用違反に対する指導の継続と家庭でのルール作りを進める指導。 ②将来を見据え、基本的生活習慣の確立やルール・マナーを守る姿勢、我慢と思いやりの心を育てる指導。 ③遅刻常習などの原因を生徒と考え、保護者の理解と協力を得て根本的な問題解決を図る指導。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状のまま D：後退した)

令和4年度 上市高等学校アクションプラン - 3 -

1 重点項目	進路指導		
2 重点課題	生徒の職業観を早期に育て主体的に進路先を探していくための情報提供と進路指導		
3 現 状	①進路目標の設定が遅れる生徒はしっかりと職業観を育てていく必要がある。 ②県内外進路研修、進路体験講座など多くの進路学習が行われているが、生徒は受動的であり、個々の活動を系統的に生かし、進路意識を高めていくことが必要である。		
4 達成目標	1 学年 進路研究を深めるため、県内を中心とした体験的行事に積極的に参加させる。	2 学年 就職希望者のうち、インターンシップに参加する生徒の割合100%	3 学年 第一希望の進学合格率と就職内定率90%以上
5 方 策	①ー1 上市高校キャリア教育プログラム「職業を知る会」「職場見学」「インターンシップ」に多くの生徒が参加することで、早期に職業に触れ、職業観を育成していく。 ①ー2 北陸の大学や医療系の学校の入試難化や、推薦入試を含め多様化が進む入試システムに対応し、入試関係の情報を随時、生徒・保護者に提供する。 ②ー1 新型コロナウイルス感染症等の影響で景気が不安定な状態が続いており、求人動向が不透明である。生徒の求職活動を十分に支援するために、企業の採用情報を的確につかみ情報提供に努める。 ②ー2 オープンキャンパスや各種施設見学など、体験的な学習への参加を生徒に勧め、受験への意欲付けや就職後のギャップを減らす。 ②ー3 教職員の進路研修の一環として、主に進学実績のある大学・短大等の学校説明会や入試説明会への参加を勧める。		
6 達 成 度	1 学年全体として「県内進路研修」が実施でき、2 年次以降の分野選択の一助となった。さらに「一日看護体験」に参加するなど、自己の進路選択の幅を広げようと各種行事に積極的に参加していた。	4 月実施の進路希望調査で就職を希望した55名のうち、今年のインターンシップに参加したのは37名(67.2%)であった。25社に協力いただき、参加生徒にとって、進路実現に対する意識の深化が図られる機会となった。	第一希望の進学合格率は94%、就職内定率は92%であった。 数字上ではいずれも目標達成といえるが、進学希望者のほとんどが各種推薦入試による合格である。就職は売り手市場の好条件を反映した結果となったが、他校に比較して内定率が低い状況にある。
7 具体的な取組状況	①新型コロナウイルス感染症の影響が心配されたが、「職業を知る会」「インターンシップ」「職場見学」を実施できた。しかし「インターンシップ」は実施日数を短縮した。 ②全校生徒を対象に、学年毎に時期を変えて「進路ガイダンス」を実施した。校内で専門の講師陣から講義を受けることで、個々の知的好奇心や進学意欲の深化が図られ、社会人になるにあたっての基本的な考え方を知ることができた。 ③3年生就職希望者に対して「応募前職場見学」に積極的に取り組ませた。複数社の見学を通して本人の適性と希望に合った選択ができるように、担当者が中心となって事業所と連絡を密にとったことにより、出願先の決定を円滑にすすめることができた。		
8 評 価	B	B	B
9 学校評議員の意見	進路支援の取組は良く評価も素晴らしい。学校生活が充実すると居場所として愛着が湧いてくる。それが学校への信頼に繋がり、学習活動へと効果が波及し、さらに生徒指導へ好影響が及んでいくものだと思う。		
10 次年度に向けての課題	①本校キャリア教育の柱である「職業を知る会」「職場見学」「インターンシップ」は、継続的に実施されていることで地域に認知されてきた。今後は「会社を知る・就職の仕組み」といった内容で、他の関係機関との連携することも視野に入れ、さらなる充実を図りたい。 ②従来の進路体験講座の実施を止め、「進路ガイダンス」の充実にも努めた。可能な限り、分野を問わず、専門家による講演(ミニ講義)を実施し、生徒が「知り」「学び」「深める」きっかけを作る必要がある。 ③就職希望者が内定を得やすい状況になってきたが、さらに確実にするために、各事業所が求める人物像(能力・成績・適性)に関する情報を共有する必要がある。本校卒業生の勤務状況の把握も兼ねて、採用担当者との情報交換を密に行い、信頼関係の構築を一層図る必要がある。		

(評価基準 A: 達成した B: ほぼ達成した C: 現状のまま D: 後退した)

令和4年度 上市高等学校アクションプラン 年度末評価 — 4 —

1 重点項目	特別活動	
2 重点課題	学校行事や部活動を通してのリーダーシップ育成や学校生活の充実	
3 現 状	①コロナ禍で令和2、3年度の2年間は様々な形で学校行事や生徒会活動が影響を受けた。体育大会・マラソン大会の縮小や中止、学園祭の縮小、ボランティア活動への制限や縮小、生徒総会の書面開催で「為すことによって学ぶ」はずの特別活動が十全な形では行えなかった。ようやく少し感染状況に落ち着きが見えてきた今年度こそ、原点に立ち返って、「学校行事」にしっかりと取り組ませ、リーダーシップ育成や学校生活の充実を図りたい。 ②部登録はしているが活動していない生徒や、安易に退部する生徒も多く見られる。継続して部活動を行っている生徒は、全体の60%である。令和3年度は全学年平均55%の生徒が部活動の個人目標を達成できたと答えている。	
4 達成目標	①学校行事に「満足を感じた」生徒の割合60%以上(体育大会と文化活動発表会の後にアンケート実施)	②部活動の個人目標を達成した生徒の割合60%以上(12月にアンケート実施)
5 方 策	①コロナ禍以前に実施していた学校行事を経験していない生徒がほとんどである中で、以前は伝統的に伝わっていた準備や運営方法が途絶えている。学校行事をゼロから作り上げる新たな気持ちで、生徒も教員もより丁寧で、懇切なコミュニケーションやマニュアル作りを心がける。	②部活動の必要性や魅力を理解させ、体力や技術、意識の向上とともに人間的な成長と個性の伸長を実感させ、学校生活の充実を図る。 また、部長会議を各学期2回実施し、状況把握を行うとともに、必要な対策を行う。
6 達 成 度	①体育大会の事後アンケートでは「よかった。まあよかった」と答えた生徒は59.4%だった。 ②文化活動発表会の事後アンケートでは「よかった・まあよかった」と答えた生徒は84.5%と大変満足感のある結果だった。	1月に部活動アンケートを実施した。「自分なりの目標を達成できた」生徒は1、2年生でそれぞれ61%、3年生は84%だった。また、部活動に加入している生徒のうち、69%が個人目標を達成できたと感じている。
7 具体的な取組状況	①体育大会は降雨ため体育館内での実施になった。応援披露のみグラウンドで行えたが全競技を完全実施ができなかったことが残念だった。天候や気温に対応した準備が必要と感じる。 ②文化活動発表会では全校生徒が一堂に会する形式は3年ぶりとなった。ステージ発表では吹奏楽、演劇、ダンスなどのパフォーマンスが大変好評であった。一方、後方の座席ではステージが見えづかったという意見やリハーサルを進め方など課題も明らかになった。	
8 評 価	A	A
9 学校評議員の意見	特別活動の取組は良い。学校生活が充実すると愛着が湧いてくる。特別活動でメリハリがあると学習活動も好影響が及んでいくものだと思う。 行事は学校生活の一番の思い出になると思うので、どんな形でも実施して欲しい。	
10 次年度に向けての課題	①学校行事の主体者は生徒であることを生徒に自覚させ積極的に活動できるように指導を工夫する。 ②運動部、文化部ともに活動の活性化を図るために引き続きエキスパートや外部コーチの活用を進める。 ③1年生の部活動全員加入を見直すことで、不活動部員を減らし充実度を高める。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状のまま D：後退した)